

---

# しゅーていんぐすたー

マグロ頭

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

しゅーていんぐすたー

### 【コード】

N5039B

### 【作者名】

マグロ頭

### 【あらすじ】

もし、何でも叶う流れ星が目の前に現れたとしたら、あなたは何を願いますか？金ですか？幸せですか？なかなか決められませんよね。そこで思い付いた最高の願い事。さあ、一体何なのでしょうか。

「突然ですが、必ず願いが叶う流れ星があなたの前を流れるとしたら、あなたは何を願いますか？ えっ？ そんなものはない？ あなた、夢が無いですねえ。願えばいつかは叶うものなのですよ。だってほら、現にわたしがその流れ星を見たんですもの。信じない？ ではまあ聞いて下さい。わたしのあの夜の不思議な体験を」

しゅーていんぐすたー

「ある夜の事でした。暑くもなく寒くもなく、ただジメツと空気が湿っていたあの夜。まるでぬるま湯の中のサウナに入っているような寝苦しさと目を覚ましたわたしは、驚くべき光景を目の当たりにしたのです。

……実を言うと、あの夜、わたしは自室の窓を開けたまま、しかもカーテンも閉めずに寝ていました。そのせいであんな体験をしたんです。

しかしながら……。あの日のわたしは何を考えていたのでしょうか。隣のマンションの狼さんが、わたしの事をじつと観察して発情していたかもしれないのです。ああ、おそろしやおそろしや。世も末という言葉がやけにはつきりと浮かんできます。

全く、どうして世にはびこる性犯罪はなくならないのでしょうか。相手の意思を、プライバシーを無視して自分の性癖を押し付けるなんて最低ですよ。そんな奴は死んでもいいと思います。

大体ですよ、この頃いやらしい顔をした男共が増えすぎなんですよ。もっと自重して、相手を思い遣る事が大切だと思っんです。って言うか、どんな事にも当てはまりますよね、これ。相手の立場に

なって、相手の事を思い遣る。そんな事をしない奴なんて馬鹿も甚だしいですよ。わたしの立場になってみたらどうですか！

……あつ、はい。そうですね。話がそれました。すみません。本当に。ええ、はい。先に進みます。

ええつと、ああ、あれですね。はい。まあとにかくわたしは目を覚ましたんです。そしてその時、開け放たれていた窓の隙間から、いかにも流れ星っていう感じの物体がわたしの部屋に入り込んできたのです。

しかしながら、その流れ星っぽい物体は、流れ星というにはあまりにも貧弱でした。もちろん生き物としての貧弱という意味ではありませんけれど。でも、その、何と言うか、覇気がなかったのです。普通、皆さんが想像する流れ星というと、形はともかくとして、一応星なんですから、神々しいまでの明るさを連想すると思うんです。それにですよ、わたしの場合、その星というか何というか、まあここでは星としておきますけど、その星が部屋に入ってきたのですから、それはもう、目を瞑ってもなお眩しいくらいの強烈な光が部屋を明るく照らし出すと思うのです。普通は。

ですが、この流れ星っぽい物体ときたら……。もう弱々しいまでの光に、逆にはらはらしましたよ。もしここに一陣の風が吹いたら……。もし軽くでも息を吹きかけてしまったのなら……。恐怖にも似た感情が沸き上がってきました。

今思えば不思議なのですが、わたしはその時、その流れ星っぽい物体を大層いとおしく思っていたのです。だからもう、何としても消さまいと思つて、流れ星っぽい物体が入ってきた窓をすぐ閉めてライターとか、ろうそくとか。はたまた電池なんかを、とにかく何とかしようと思つて、片っ端から集めてきたんです。

そしたらね、気が付いたんです。なんだか、光の中に黒いものがあるつて。とても小さかったので、いくら目を凝らしても分かりませんでした。何とか分かったのは、その小さな黒いものが文字であ

るという事くらいでした。

わたしはどうしてもその文字が読みたくありませんでした。それは、失恋した後、無償に焼肉が食べたくなるあの衝動の、更に上をいく激情でした。見たい見たい見たい。見て読みたい。高まっていく激情は、あるひらめきを生み出しました。あの、小さなものを大きく写し出す魔法のレンズ。そう、虫眼鏡です。

わたしは急いで部屋中を駆け回りました。駆け回るといっても、2LDKのアパートの一室ですから、そんなに時間はかかりません。部屋中の収納スペースから全ての物を取り出して、虫眼鏡を見つけてる事。これにおよそ一時間近くかかったのです。さあ、その結果はと言うと……ええ、そうですね。わたしの手には、何も握られていませんでしたよ！ おかしいなあ、確かあったはずなのに……。

今思えば、虫眼鏡なんて買った覚えなかったんです。でも、おばあちゃんの家の子供の頃行った時のような、漠然とした虫眼鏡の存在感を、あの時、部屋の中に感じていたのです。

勘違いなわたしは焦りました。どうしようどうしようどうしよう。この時ほど虫眼鏡の重要性を感じる事は、後にも先にもないでしょう。そう、あの時虫眼鏡さえあれば、わたしはこんな事には……。

後悔先に立たずです。話を進めましょう。わたしはしょんぼりした面持ちで流れ星っぽい物体のところに戻ってきました。この時のわたしは、昨日学校の先生に、

「絶対に明日いるからね」

と釘を刺されたプリントを、朝確にランドセルに入れたはずなのに、見えない小人さんたちによって隠されてしまった小学一年生のように惨めで、悔しすぎる気持ちで一杯でした。だからでしょうか、その変化になかなか気付けなかったのです。

流れ星っぽい物体はわずかながら大きくなっていました。と同時に光の強さも強くなっていましたのです。

落ち込み、うずくまっていたわたしを、突然の機械的な音声が我に返らせました。

「コンバンハ、地球ノ一人類ヨ」

わたしは、

「ヒヤイ！」

という感じの小さな悲鳴をあげてしまいました。ちょっとビビっていた……。でも流星というか、やはりというか、わたしはすぐに声の流れ星っぽい物体から出ていると理解し、落ち着きを取り戻しました。

「キサマノ目ノ前ニアルコノ物体ハ、地球人ノイウトコロノ『流れ星』デアルヨ。ダカラサ、早く願イ事ヲ言ツテヨ。ジャナイト研究ニナラナイジャナイカ。サツキカラ黙ツテ見テレバガサゴソト動き回リヤガツテ。ソレガ何ダ、終ワツタト思ツタラ急ニ黙リ込ミヤガツテ。全ク、コレダカラ宇宙進出ノママナラナイ文明ハイカン。オイ、早ヨシロヨ。早ヨ言エヨ。コノ地球人風情ガ」

言葉づかいが悪いな。わたしはその時そんな事は思えませんでした。何たって、宇宙進出とか、何か凄い単語さえも耳に入らなかつたのですから。でも、でもね、今のわたしならそう思いますよ。ええ。このやろう、初対面の相手に何て言葉使つてやがんだ。馬鹿やろう。お前短気過ぎんだよ。

ああ、また話が逸れてしまいました。はい。進めます。ごめんなさい。

……とにかく、その時のわたしはその声と、命令口調のその内容に驚いて、急いで願イ事を列挙し始めたのです。

えっと、ここからはその時のわたしの願イ事になります。なるんですか……。あの、どうか呆れないで下さい。とても下らない内容なんです。

……でも、仕方ないじゃないですか。突然、意味も分からず、脅迫めいた口調で命令されたら、誰だって取り乱してしまいますよ。

・お金がほしい。

・男がほしい。かつこいい男。でも、筋肉は自然に付いてる感じで、爽やか系じゃなきゃ嫌。

・愛がほしい。誰か隣でわたしを慰めてくれないかな。

・あつ。こんな私的な事ばっかじゃダメだ。平和！ 世界が平和になつてほしいです。

・飢餓に苦しむ人がいなくなりますように。

・……でも叶えられるのって、たった一つじゃないかな。もしそうだとしたら……。平和とか何とかほざいてる場合じゃないじゃない！ やめやめ。やっぱりわたしが一番よ。

・でも、わたしだけ大金持ちとか、幸せの超絶頂とかになったらみんなから恨み買いそうだよ。

・うーん、どうしよう。どうしたらいいのかしら！

十中八九、お前最悪だなどお思いの事でしょうね。まあ仕方ありません。わたしもそう思います。でも、でもね、考えてみて下さいよ。自分が望む事が叶うんですよ。無理な事とか出来ない事なんてなくなるんです。そんな立場になったら、自分のしたい事、ほしい物を望むでしょう。流れ星に願っちゃいますよ。

第一、これは何なんですか。報告文？ はっ。知った事じゃありませんよ。何でわたしが宇宙人の研究に荷担しなきゃならないんですか。何でわたしみたいな一般市民が選ばれるんですか。こんなのはねえ、ある決まったスターみたいな人がやるもんなんです。一般市民なんかとは違う、特別な生活をしているお方が体験するもんなんです。間違つても、わたしみたいな庶民がやるもんじゃないんですよ！ 大体ねえ、わたしはあんたたちが……

すみません。

少し熱くなりました。本当にすみません。その、だから、この凶

器の数々を下げてくださいないでしょうか。わたし、また記録し始めますから。はい。そうです。もうあなたたち宇宙人の事は考えません。あつ、今のもですか？ 今のは不可抗力というか何と……すみません。言い訳です。はい。そうです。善処します。

ふう。何とか乗り切りました。今ので何となく分かったかもしれないですが、これは報告です。どういう原理か分かりませんが、考える事によって文章として記録されるらしいのです。難点は、考えた事が同時に音声として出でしまう事ですがね。でも凄い。凄いです。宇宙は広い……！ にしても、こういう装置の事は記録してもいいのに、何でさつきみたいのはダメなんだろ。よく分からないです。

まあ、そんな事は置いといて。わたし、何としてもやり切らねばなりません。そうじゃないと、そうじゃないと……！

ああ、また熱くなってしまうました。いけませんね、こんなんじや。話を元に戻しましょう。どこまでいったっけなあ。ああ、わたしお願い事を頭に思い浮かべたあたりだ。ええつとですねえ、ええつと、つまりそうやって数々をの願い事を列挙して思い悩んでいた時、わたしはついに最高の、でも今となっては最悪の願い事を思い付いたんです。そして言いました。

「後何回でも、願い事を叶えてください」

一体全体、わたしは馬鹿者の他の何者でもありません。欲張りすぎたのです。欲張りはいけなかったのに。欲望は身を滅ぼすのに。強欲は最大限の幸せと、絶対的な破滅をもたらすのに。決まっていた事だったのに、わたしはその時、確に言ってしまったのです。「後何回でも、願い事を叶えてください」と。

「ファイナルアンサー？ イエス、ノーで二秒以内二答エナサイ」

「命令ですか！」

「イチニイドボン」

「はやつ！」

「返答ヲ確認スル事が出来マセンデシタ。返答ヲ確認スル事が出来

マセンデシタ。コレヨリ目標ノ記憶抹消処理二取り掛力カリマス」  
「えっ！ ちょ、ちょっと待った！ いくらなんでもあんな返答時間はないと思うん……です……け……ど……」

後から聞いた話ですが、わたしの願いは規模がでかすぎたそう。その結果、二秒しか返答時間がなかったらしいのです。そう、これこそ、わたしがあれほどに、欲深き事はいけない事だと言った所以なのです。

わたしは答えられませんでした。たった一言、イエスという言葉。よって、流れ星っぽい物体は、それこそまさに想像していた通りの神々しいまでの光を放ったのです。次の瞬間、わたしは気を失い、そして何故か今、ここにいるわけなのです」

そこまで思いを巡らして、わたしは一息入れた。そして、真っ白な牢獄の端っこ、ぼつんと置いてあるマイクまで近寄ってこう聞いたのだった。

「あの、わたしの体験した事はこれでもう終りなんですけど」  
相手から返事はない。

「あの、まだ解放しては頂けないのでしょうか？」  
何処からともなく、機械みたいな声が響いた。

「マダダ。マダ話を聞カセロ。才前ノ話八面白イ」

「ええっ！ そんな。聞いてないですよ。体験を報告文として報告すれば帰してくれるって言ったじゃないですか」

「イイカラ！」

声と同時に、さっきも脅されたドリルやら鋏やらナイフやらを、一体どこから現れているかは分からないけれども、突きつけられた。はあ、と溜め息をついて、わたしは牢獄の中心に戻っていく。次に話すべく、過去の出来事を思い出しながら。一体わたしはいつ地球に帰れるのだろうか。そんな事を考えながら。

(後書き)

前に書いたハイテンションな作品。私のハイテンションはこれが最高です……。

しゅーていんぐすたー

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5039b/>

---

しゅーていんぐすたー

2008年8月29日18時28分発行